

洗剤論争講座①：リベラル再生は脱・反資本主義から

大矢 勝

合成洗剤追放運動とは合成洗剤は環境・人体に悪いから石けんを使うべきとする日本の代表的な消費者運動であり、1960年代から2000年頃まで盛んでした。また日本の消費者運動は日本のリベラル運動の代表といっても良いものです。実は、合成洗剤に関わる消費者運動を振り返ると、日本のリベラル全体の縮図を見ることができます。今回は合成洗剤論争について書いていこうかと思いましたが、その各論に入る前に、リベラル再生に関する個人的な想いを綴らせて頂きたいと思います。

『人権』と『反資本主義』のどちらが大切？」このように問いかけると、日本のいわゆるリベラル派の人々は混乱してしまいます。それは、「反資本主義＝人権派＝リベラル」というステレオタイプ（固定観念）に支配されてしまっているからです。しかし反資本主義と人権を同一視する、或いは同じ方向のベクトルだとみなすのは、実は間違っているのです。共産主義等の反資本主義体制下の人権問題を探し出せば論破されてしまいますので、そのステレオタイプの否定は簡単です。

では、なぜ反資本主義＝リベラルというステレオタイプが出来上がったのでしょうか？実は私自身も中学生～高校生の頃に、どっぷりと反資本主義的な考え方に浸っていた経験があり、後に合成洗剤論争に関わった経験があるので、その周辺状況を理解しやすい状況にあります。では、その理由を説明しましょう。

第二次世界大戦後の日本、それは軍国主義的な国内体制を全面的に否定して平和な世の中を構築しようと頑張り始めた時代ですが、「心の近代化」からは程遠い状況でした。貧富の差が激しく、一部の富裕層が多数の市民から搾取するという社会構造で、社会矛盾の塊のような世の中でした。水俣病などの大企業の卑劣な姿勢が報道されることにより、富と権力の集中に対して、多くの国民が怒りを感じるようになりました。特に当時の大学生や高校生等には社会を変革したいという目標を与えることになりました。それが貧富の差の元凶である資本主義を打倒するための、社会主義や共産主義等の反資本主義です。私も若い頃は反資本主義思想を支持していました。しかし、それは勘違いに基づく判断だったのです。

ひとつ分かりやすい事例を挙げましょう。あなたは現在、中学生であると仮定します。担任の先生は希にみる最悪の性格で、人前であなたを罵り、恥をかかせてニタニタしています。あなたは心が折れてしまい、学校に行けなくなってしまいます。さて、あなたはどう感じるでしょう。ほとんどの人々は「学校なんて無くなってしまえ」と感じます。その後、学校制

度を廃止するために人生を捧げるといった行動に出るかもしれません。

しかし冷静に考えれば、悪いのはその担任個人です。学校制度に非があるとしても、不適応な担任を雇用しているチェック機能の不備が問題視されるべきで、学校制度全体を敵視するのはおかしいのです。しかし、不満や問題に直面している場合、ついつい短絡的に「担任の問題＝学校制度の問題」との思い込みに支配されてしまいます。

これと同様に、資本主義社内の中で生じた人権や社会矛盾の問題を「資本主義打倒」に結び付けてしまったことが日本のリベラルの根本的な問題だったのです。その後、反資本主義社会の中でも悲惨な人権問題を抱えている場合が多いことも明らかになり、「反資本主義＝人権派」という構図は崩れてしまいました。すると、新たな知識層メンバーを集めるのは難しくなってくるのですが、旧メンバーの気持ちはなかなか修正できません。旧メンバーは社会変革を目指した知的エリートが多く、現在ではマスコミ、弁護士、政治家、大学教員等の社会的な影響力を有する立場の中でも上位層のかなりの割合を占めています。その人たちは多くの人々に影響力を発揮してきたので、今更間違いでしたと態度を翻すわけにもいきません。

学校制度を打倒したい人にとって、マスコミで報道される学校の問題というのはカンフル剤になります。学校関与の問題は決して消滅せず、必ず定期的にマスコミを賑わせます。その報道された学校の問題は、学校制度打倒という目標が正当だったんだと自身を納得させる材料になってしまいます。同様に、資本主義社会の中で大企業関与の問題はなくなることがありません。だから反資本主義も正当化されてしまいます。企業と政治家の繋がりなどは反資本主義者からみれば自身を正当化する絶好の材料になります。但し、実際にマスコミ等で取り上げられるのは政界をも牛耳る財閥系の大企業とは言い難い、言い方は悪いですが成金的企業とでも称すべきところが関与している場合が多いように思えますが。そして、それらの成金的企業の問題は資本主義の本質的問題とは言い難いのですが。

さて、では今後のリベラルはどうあるべきかを考えましょう。人権、平等、平和など社会正義と呼べる価値観は、今後の世の中にとっても重要であることに変わりはありません。問題になるのは「反資本主義」と一体化していることが足を引っ張るようになってきたということです。資本主義も反資本主義も一長一短ですが、その一方のみを正当化してその逆を絶対悪に位置づけようとする歪みが生じてしまいます。具体的にはモラルに反した情報操作などを誘発してしまいます。実際、最近のリベラル派情報媒体の信用はガタ落ちといっても良い状態です。

このように「反資本主義」がリベラルの足を引っ張るようになっているのですが、これまで

のリベラルの「反資本主義」が間違いだったかというとは決してそうではありません。その分かりやすい目標を掲げた市民運動の成果として、日本でのリベラルな環境が整備されてきました。合成洗剤追放運動も、合成洗剤の追放には至りませんでした。消費者運動を活性化して消費者保護環境を整備するのに大きく貢献してきました。明確で分かりやすい「反資本主義」はこれまでリベラル運動を推進してきた重要な概念として再評価されるべきです。但し、一応の役割を果たしたとして、これからのリベラルからは切り離されるべきです。

では、リベラルの次の戦略はどうあるべきでしょうか？ 地球上の人口増、資源減少、環境悪化等の難関を乗り越えるためには、「感情から理性へ」の流れが必要ですが、具体的にどのような対応が求められるのでしょうか。実は、リベラル運動の代表例に位置づけられる「合成洗剤・石けん論争」からそれらの課題に関する教訓を学ぶことができます。以降、時間があれば各論を記していきたいと思います。

2019年8月16日